

平成27年度一橋大学附属図書館企画展示

蔵書票の世界

モチーフから見る本間要一郎蔵書票コレクション

2015 | 10 | 30 fri — 11 | 30 mon

10:00-17:00 (土・日・祝日は閉室)

*ただし、一橋祭期間中 11/1(日)、2(月)、3(祝) 9:30-17:00 は開室

*会期中、一部展示替えあり

一橋大学附属図書館展示室(時計台棟1階)

問い合わせ先／一橋大学附属図書館 研究開発室 042-580-8252

講演会：11/20(金)14:30-16:00

内田市五郎氏(日本書票協会会長)
神山幹夫氏(日本書票協会理事)

会場／附属図書館会議室

蔵書票とは、本の持ち主を表すための紙片である。その多くは版画で、所有者の名・特定の文言・図柄が刻まれている。いわば「大切な持ち物には名前を記す」発想に始まったといわれる蔵書票は、今日では「紙の宝石」という別名とともに、美術的興味の対象になっている。小さな紙片に凝縮された美的世界には、繰り返し現れる図柄があり、好まれて使われるモチーフには意味がある。

紋章は、蔵書票のモチーフとしては初期から用いられている図柄である。紋章のはじまりは、戦場で敵味方の両方に自身の存在を知らせるため、武具である「楯」に「一見してその人と識別し得る図柄」を描いたことにあるという。蔵書票が現れた15世紀当時、西洋の紋章は個人単位で定められ、同一国内・同一主権領内では同じデザインを認めないという厳しい制約があった。日本の家紋と異なり、同じ一族、たとえば親子であっても、同時期に同じ紋章が用いられることはなく、類似していても細部では異なるデザインが用いられていた。紋章は個人の特定を意味することから、紋章を用いた蔵書票は署名にも似て、本の持ち主を明示する役割を担った。

初期の紋章のデザインは、楯の内側に個人を特定する図案を施した簡素なものであったが、次第に、楯の周りを兜飾り・ヘルメット・マントで飾ったり、楯の両側に動物や人物を配して支えるといった装飾が加えられ、その全体を紋章として使用するようになった。蔵書票に用いられる紋章にも、楯を含む紋章全体を描いているもの、楯部分のみを切り取って使っているものの両方がある。

18世紀初期のイギリスの蔵書票では、楯を中心に配置し、その周囲にライオンや鹿といった動物や植物の葉、貝殻などを左右対称に描いた図柄が多く見

られる。楯の上部ないし下部にあしらわれたリボンや台座の部分に、票主（蔵書票の制作依頼者・持ち主）の好む格言が入ることも多い。18世紀半ばになると、輪郭をゆがめた楯の図柄が現れ、その周りを縁取る形で、流線的な花や葉、貝殻の装飾を非対称に配したデザインが流行した。18世紀終わりと、楯のゆがみは解消し、楯の縁も飾りがなくシンプルになり、全体を花輪や小枝で囲んだデザインが現れる。19世紀に入ると、楯のみをモチーフとする装飾の少ないデザインや、風景画のなかに楯を配置したものが見られるようになる。20世紀初頭には、シンプルなデザインで小型の蔵書票の他に、豪華な装飾を施した大判の蔵書票も制作されている。

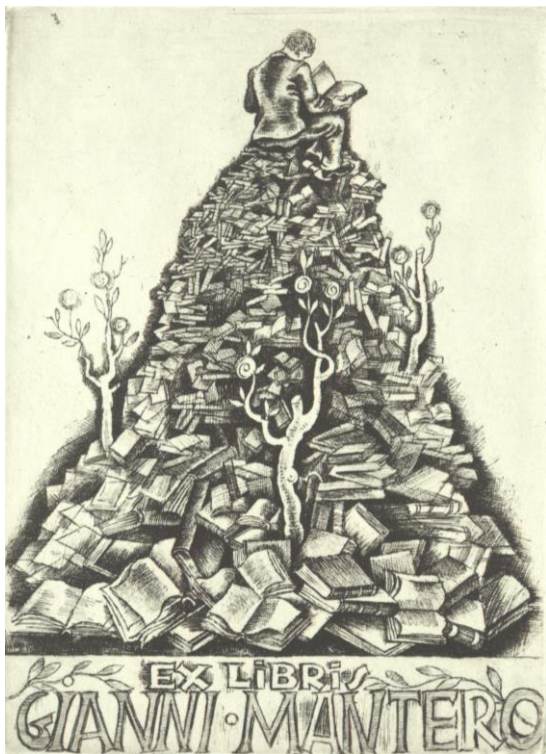


作者不詳 (109×75 mm)

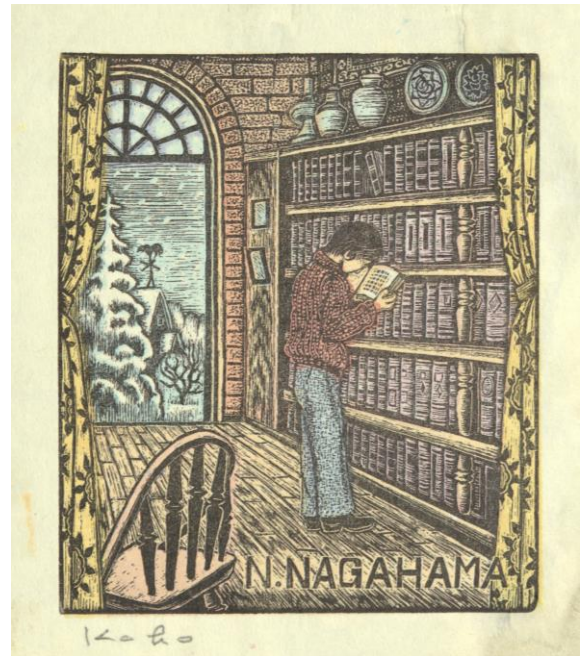
紋章をモチーフとした蔵書票の多くは個人蔵書に用いられているが、数は少ないながら、修道院や図書館の蔵書票にも使用されている。たとえば大学図書館の蔵書票には、校章をあしらったものや文庫寄贈者の紋章からデザインされたものがある。修道院の蔵書票には、聖職者やその帽子と組み合わせられたデザインが多い。

書物をモチーフとした蔵書票は、17世紀後半から流通していたとされる。機械による本の大量自動生産が可能な現代と異なり、書物は当時貴重品であった。15世紀半ばに活版印刷が登場する以前の本は、人の手で1冊ずつ書写しなければ生まれなかったし、活版印刷が登場して以降もなお本は高価で、一般市民の手に行き届いていなかった。票主は、貴重品である書物を所有していることを誇りに思い、蔵書をさらに増やすことを期待し、本をモチーフにした蔵書票を制作したのではないかとされている。

「堆積書物」は、大量の本が描かれている図柄で、本は平積みにもされたりピラミッド状に積み上げられたり、あるいは書棚に隙間なく並べられている。大好きな本をたくさん所有する喜び、これからも本を集め続ける願いがくみ取れる。



Michel Fingesten (101×73 mm)



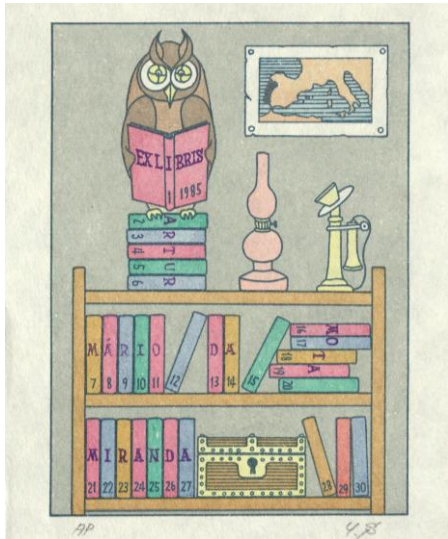
大内香峰 (74×64 mm)

本と別のモチーフを組み合わせた図柄もある。書物と動物との組み合わせには、ネズミ・フクロウ・ネコなどがあり、書物と静物との組み合わせには、お酒やランプなど「読書のお伴」が描かれている。あるいは、本と人という組み合わせもある。たくさんの書物を背にたたずむ姿、ソファに腰かけて読書をしている姿、書棚の梯子に足をかけている姿など様々ある。人物はどこか票主を思わせる。

書物のモチーフは洋の東西を問わず人気の高い図柄であり、本に対する人類共通の深い愛着を窺い知ることができる。

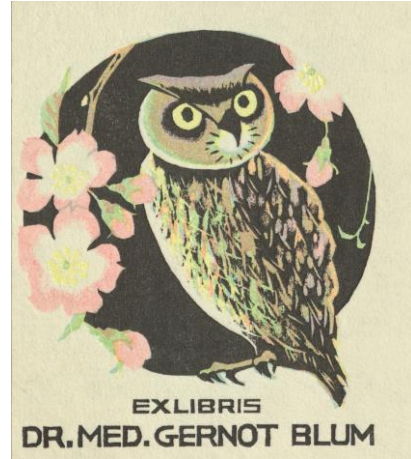
フクロウは、洋の東西を問わず好まれるモチーフのひとつであり、蔵書票の図柄に用いられる動物のなかでも登場頻度が高い。

フクロウを描いた蔵書票には、樹木にとまった、あるいは飛翔する姿が単独で描かれているものが多いが、書物との組み合わせや、夜を連想させる灯火と組み合わせたものもある。フクロウが主役を譲り、図柄の一部として蔵書票のなかに小さく描き込まれたものも見受けられる。



末廣吉成 (110×80 mm)

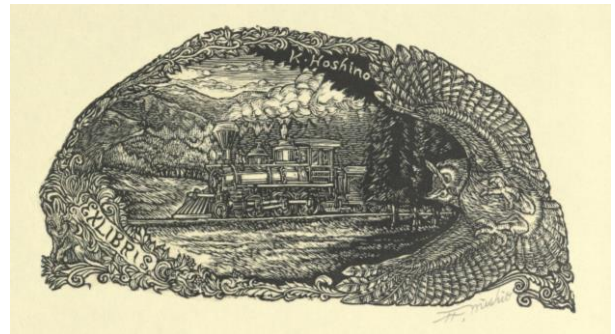
西洋でフクロウは古くから、夜行性・肉食性・非群生性といった性質やその物悲しい鳴き声から、死や闇の象徴とされた。一方、視覚・聴覚が優れていること、木にとまりじっとしている昼間の姿などから、孤独で思索的な英知、夜通しの研究や学問の象徴ともされた。古代エジプトの象形文字では死・夜・消極性を意味するが、古代ギリシャでは、知性と学芸の女神アテナ（ローマ神話ではミネルヴァ）の従者として聖鳥視された。



敦沢紀恵子 (69×60 mm)

しかしキリスト教が広まるにつれ、古代ギリシャ・ローマの神々の神性が失われるとともにフクロウの持つ神聖さも失われ、殊に中世キリスト教社会では、夜行性のフクロウは魔女の使いとして忌み嫌われた。この悪しきイメージが変化したのは、ルネサンス期の古代ギリシャ・ローマ文化復興運動の影響が大きい。フクロウは、古代ギリシャ文化の中心地アテナイの守護神アテナの従者であったことから、知性と学芸の象徴性が与えられ、蔵書票にも好んで描かれたものと思われる。

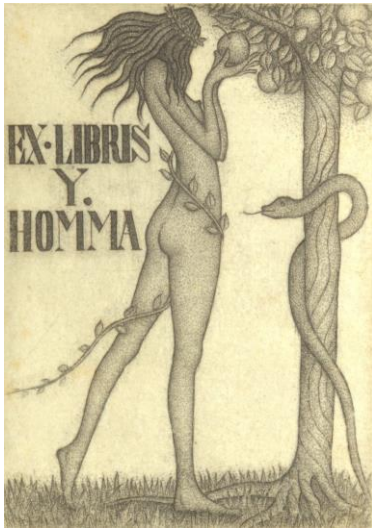
日本でフクロウは、古代に瑞鳥（縁起の良い鳥）とされたこともあるが、中世から江戸期にかけては中国と同じく凶鳥とされていた。それが現在では、知性や学芸の象徴となっているのは、明治期に紹介された西洋の蔵書票の影響があるという。



三塩佳春 (65×126 mm)

蛇は様々な神話や物語に登場し、その意味するところはまったく異なる。ここでは4類型を紹介する。

「エデンの蛇」は旧約聖書『創世記』の有名な一場面に現れる。何不自由なくエデンの園で暮らしていたアダムとイヴは、「善悪を知る木の実」だけは食べてはならないと神に固く禁じられていた。しかしある日、狡猾な蛇にそそのかされたイヴはその木の実を口にし、彼女に勧められたアダムもそれを食べてしまった。激怒した神はふたりを楽園から永久に追放し、彼らは人間の苦しみや死の運命を背負いながら生きることになったのだという。蛇は人間の敵と見なされ、呪われた生物・悪の象徴とされた。誘惑する邪悪な蛇と、禁断の果実を口にするアダムとイヴという組み合わせは、絵画など芸術で繰り返し登場する図柄で、蔵書票もその例外でない。

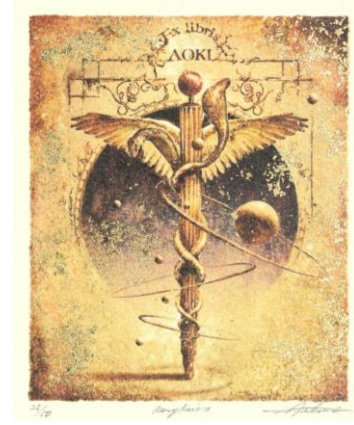


桐村茜 (67×49 mm)

「アスクレピオスの杖」は1匹の蛇が杖に巻き付いた図柄である。アスクレピオスとはギリシャ神話に登場する名医であり、その杖は医学や薬学のシンボルとされた。蛇は毎年脱皮することから、復活・再生・若返りを連想させたと考えられる。

「ヒュギエイアの杯」は杯の持ち手に1匹の蛇が巻き付いた図柄である。ヒュギエイアとは先述した名医アスクレピオスの娘で、同じく医療の象徴となっている。親子で差異があるとすれば、アスクレピオスの杖は医学の象徴として、ヒュギエイアの杯は薬学の象徴として用いられることが多い点である。ふたつとも医者蔵書票に多い。

「ケーリュイオン」はヘルメスの持つ杖の名前で、2匹の蛇が杖に巻き付いた図柄である。蛇は、杖をはさんで左右対称に絡み合っている。ヘルメスはギリシャ神話に登場する神で、牧畜・窃盗・発明・音楽・伝令・商売といった様々な人間活動を司ることから、彼の持つ杖ケーリュイオンは一般的に商業と交通のシンボルとされている。この図柄は一橋大学の校章にも採用されており、ローマ神話のメルクリウス（ヘルメスに相当）から「マーキュリー」の名で親しまれている。

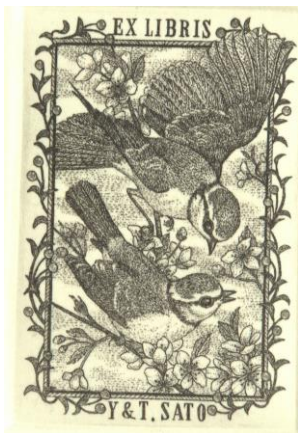


西川洋一郎 (113×94 mm)

以上紹介した蛇はいずれも聖書や神話に登場するものであるが、意味するところは善であったり悪であったり、生であったり死であったり、互いに対立する場合も少なくない。これは、古来より蛇のモチーフは多義的な着想の源であったことを示している。

動物のモチーフは古くから蔵書票に用いられていたが、ヘビやフクロウの例にあるように、神話や物語と関連づけて描かれることが多かった。しかし19世紀末頃になり蔵書票のモチーフが多様化するにつれ、様々な動物が自由に描かれるようになった。

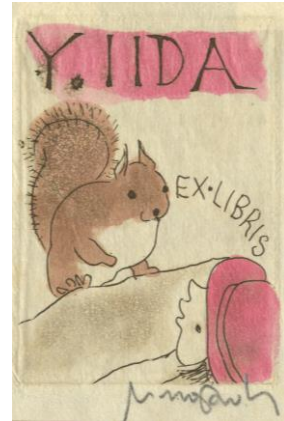
動物の蔵書票には、動物の姿を写實的に描いたものと、デフォルメや擬人化を伴ったものがある。前者の図柄に、木にとまる小鳥、空に羽ばたく鷺、野を駆ける馬、草むらに憩う鹿、池で泳ぐ水鳥などがある。野原や森林、水辺などの風景も描写され、動物の生き生きとしたありのままの姿が表現されている。孔雀や鶴を美しく描いた例もあり、その色彩や緻密なデッサンには作家の表現力が余すところなく発揮されている。



対比地光子 (55×37 mm)

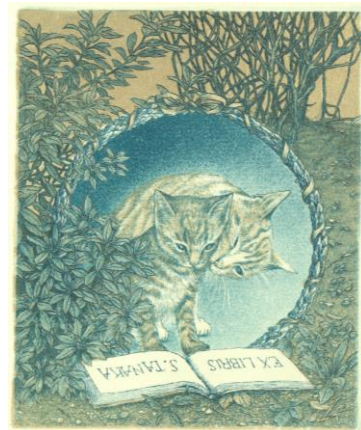
後者のうち、デフォルメされた図柄には、犬・猫・リス・ウサギなどの小動物が軽やかなタッチで描かれている。仲良くじゃれあう子犬たち、気持ち良さそうに眠る猫、木々の間からひょっこり顔を覗かせるリス、腕に抱かれるウサギなどが描かれ、作家あるいは票主の温かい眼差しが感じられる。動物園やサーカスを題材とし、カバや馬などの大きな動物が芸をしたり、人間に世話をしてもらったりする姿をコミカルに描いたものもある。遊び心をもって動物

をデフォルメして描くことで、可愛らしさやユーモアを表現しているといえる。



横田稔 (67×48 mm)

擬人化された図柄には、動物が眼鏡を掛けていたり、服を着ていたり、本を読んでいたりと、実際にはまずあり得ない場面が描かれている。猫の例では、興味深そうに本を覗き込んだり、本を読みながら首を傾げたり、読書中に居眠りしたりと、その姿は票主自身の投影と見ることができよう。身近な動物を友人や家族の一員、あるいは自分の分身としてとらえ、愛情を込めて描き出している。



内藤八千代 (115×98 mm)

動物をモチーフにした蔵書票には、作家の鋭い観察眼と確かな腕前が窺え、作家・票主の遊び心が表現されている。

19世紀末頃から蔵書票のモチーフが多様化するのにあわせ、裸体を描くエロティックな蔵書票が登場し、芸術性の高い作品が増えるにつれ人気を獲得していった。

一口にエロティックな図柄といっても、裸体の描かれ方は様々である。第1に、ギリシャ神話や聖書の題材に基づき美女の裸体を描いたものがある。たとえば白鳥と睦み合う美女の図柄は、ギリシャ神話に着想を求めることができる。この神話には、スパルタ王妃レダの美しさに魅せられたゼウスが、白鳥に姿を変えて言い寄り、レダに子を孕ませたというエピソードがある。

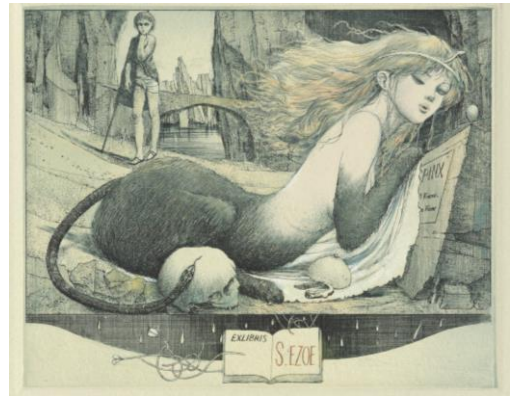


対比地光子 (92×75mm)

第2に、裸体を想像上の動物・静物に変形させている図柄がある。たとえば、人間の顔とライオンの体を持つとされるスフィンクスは、動物の毛並みを持つ半裸の美女が砂漠に横たわる姿として描かれている。女性の裸体を花や楽器になぞらえて描いているものもあり、多様な表現が試みられている。

以上の蔵書票はいずれも、裸体を芸術的・魅惑的に描く一方で、儚さや残酷さも漂わせている。裸体と骸骨の組み合わせはその最たるもので、生を象徴

する裸体と、死を暗示する骸骨が強烈なコントラストを織りなすとともに、どれほど美しい肉体にも終わりが来るという現実を想起させ、見る者は暗部に引き込まれるような感覚を覚える。



アルフォンス井上 (95×120mm)

第3に、日常生活と裸体を結び付けた図柄がある。着衣せずソファーやベッドでくつろいだり、日光浴や水浴びをしたりするものが多い。神話や寓話のなかで描かれていた裸体が日常のなかに解放され、より自然で自由な姿態を獲得している。

第4に、性的な行為を描いた図柄がある。男女の絡み合う姿や、自慰行為にふける姿などが取り上げられており、煽情的な一場面を緻密に描いたものもあれば、戯画化されたユーモラスなものもある。

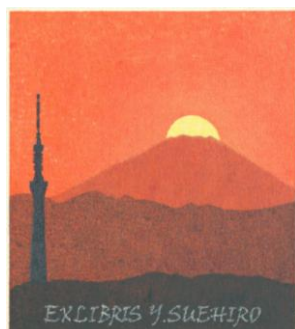
蔵書票は本来、自分の蔵書に貼付する個人的な物であり、他人の視線を逃れる形で、票主の好みや作家の創造性が発揮される。もとは秘匿の前提で作られるために限りなく自由であり、過激な表現にも躊躇がない。エロティックな蔵書票には、個人の深部にある秘密と、大切な蔵書を誰にも渡したくない、という独占の思いが込められている。

ここまで西洋的モチーフを紹介してきたが、蔵書票には日本的モチーフもある。4種を紹介する。



末廣吉成 (115×85 mm)

第1に、日本の象徴や名所がある。国内最高峰の富士山は浮世絵の題材として江戸期から外国でもよく知られている。桜もまた、日本を想起させる図柄である。観光名所には、東京スカイツリーや札幌の時計台、竜安寺と思しき枯山水の庭、沖縄の民家に見られる赤瓦とシーサーなどが描かれている。東京スカイツリーと富士山、五重塔と桜のような組み合わせの妙もある。



末廣吉成 (90×81 mm)

第2に、こけし・お面・だるま・獅子舞といった、地方に古くから伝わる郷土玩具や民芸品がある。同じ図柄を描いていても、それぞれの作品は多様な地域性や個性を反映し、その違いが見る者の目を楽ませる。たとえば色に着目すると、赤と黒でしか彩

色していないシンプルなこけしもあれば、これに青や緑を加えた色鮮やかなものもある。獅子舞の獅子頭は、赤いものもあれば黄色いものもある。赤いだるまもあれば灰色のだるまもある。形に着目すると、胴体の部分が円柱型をしたお馴染みのこけしもあれば、腰のあたりが少々くぼみ、人間の体型に近づけたようなこけしもある。丸いだるまもあれば、三角のだるまもある。



敦沢紀恵子 (110×90 mm)

第3に、日本の年中行事・風物・四季を表現した図柄がある。年中行事では、桃の節句で飾る雛人形、端午の節句で飾る鯉のぼり、お正月にあげる凧などがあり、同じテーマであってもデザインに多様性が見られ興味深い。四季では、花火・紅葉・稲刈り・雪などがある。

第4に、文学・芸能作品から採用された図柄がある。文学作品では、宮沢賢治の『風の又三郎』『ゼロ弾きのゴージュ』、民話では「鶴の恩返し」「桃太郎」がある。映画から、「男はつらいよ」シリーズの寅さんが描かれたものがある。

日本的モチーフは、異国情緒を喚起するもので、人気は国外に広がっている。現代に生きる私たち日本人にとっては、懐旧の念や憧憬を覚えるモチーフとして人気がある。